No.172 A WORD FROM ANOTHER WORLD

Superstitions and Culture　Ravinder Chana

Much like Japan, the UK has its fair share of superstitions irrespective of religion and believability varies from person to person.
A lot of these superstitions are shared in other foreign countries too, but each country has its own unique combination of beliefs surrounding events and gestures. In the case of Japan, it is widely believed that sneezing is a sign of someone talking about you and the numbers 4 and 9 are generally avoided due to the pronunciation resembling death or pain thus making it unlucky.
In the UK, people generally believe that the number 13 is unlucky, especially Friday the 13th due to it having links with biblical stories and horror movies. In the case of Christianity Judas was the 13th guest at the last supper, he was also the disciple who betrayed Jesus Christ leading to his demise. Similarly in Norse mythology Loki, the trickster god was the 13th guest at the dinner of 12 gods which lead to the death of a god.
Other widespread superstitions include saying "touch wood" or "knock on wood" prior to an action or event to avoid tempting fate. An example is if someone were to ask "have you ever failed a test?", the person answering could respond with "Not yet! Touch wood!" to avoid the possibility of failing a future test. This likely originated from the belief that spirits live in trees/wood and so can influence fortune.
In addition to these it is believed that opening an umbrella indoors brings about bad luck, breaking a mirror leads to 9 years of bad luck, horseshoe shapes grant good luck and so on. The belief in these superstitions is so strong that football teams like Arsenal in the UK have a horseshoe-shaped dressing room for the home team and a different shape for the away team so that fortune always favours them over the opposing team.
Because of these superstitions being ingrained in us from a young age, even while living abroad in Japan, foreigners like myself find it rather uncomfortable seeing someone open their umbrella indoors and avoid doing it.

【ちょっと豆知識】宮地晶子

「木に触る」というおまじないは、ヨーロッパ中に似たようなものがあります。「日本では夜、爪を切ると親の死に目に会えない、と言うよ。実は時間がなくて昨日の夜、爪を切ったから、とても気にしてたところ」とラビンダーに伝えると、とっても驚かれました。本当は傘も爪切りも危ないから、だとは思うのですが。

迷信と文化　ラビンダー・チャナ　（訳：宮地晶子）

日本と同様、イギリスにも宗教とは無関係の様々な迷信があり、信じる度合いは人によります。他の国とも共有する迷信ですが、出来事やジェスチャーに関する考えには、それぞれ独自の組み合わせがあります。日本では、くしゃみは、誰かが自分のことを噂しているしるし、と広く信じられているし、一般的に数字の４と９はその発音が「死」や「苦」に似ているので、不吉だと避けられます。

イギリスでは、一般的に数字の13、特に13日の金曜日は聖書の物語やホラー映画から不吉だと信じられています。キリスト教の場合、ユダは最後の晩餐の13番目の客であり、イエス・キリストを裏切り、死に導いた弟子でした。北欧の神話では、12人の神が集まる晩餐に、いたずらの神ロキが13番目に来たせいで神が1人死ぬ、という似たような話があります。

他によくあるのは、なにかの行動や出来事の前に、危険を呼びこまないように「タッチ・ウッド（木に触れる）」「ノック・オン・ウッド（木をノックする）」と口に出す、いうものがあります。例えば誰かが「試験に落ちたことある？」と聞いてきたら、答える側は「まだないよ、タッチ・ウッド！」と答えることで、将来の試験に落ちる可能性を遠ざける、というもの。これは、おそらく精霊が木や木材に住み、運勢に影響を与えうる、という信仰に由来しています。

これらに加え、屋内で傘を開くと不運を招く、鏡を割ると災いが9年間続く、馬蹄形は幸運をもたらすといったことが信じられています。こうした迷信への信仰は非常に強く、英国のアーセナルのようなサッカーチームでは、チーム用に馬蹄形のロッカールームを設け、相手チームには異なる形の部屋を用意して、常に自分のチームに運が向くように配慮しています。

こういう迷信が幼い頃からすり込まれているので、私のような外国人は海外の日本に住んでいるときでさえ、誰かが屋内で傘を開くのを見ると、非常に居心地が悪く、自分もしないようにしています。

英語教育指導員　宮地晶子の

エイゴノマナビカタ

第232回

「英語力を測る」

日本英語検定協会が英検の6、7級を新設します。それぞれ小学校の中、高学年の英語学習に対応して「生涯にわたる英語能力育成」のスタートラインを早めるのだそうです。早くから英検を受けたら、力がつくのかな。だれのための新設なのでしょう。生徒に日頃から言っているのは、本物の英語力をつけること、その結果として英検に受かること。そのレベルに達していないのに、受けるのはもったいない。ぎりぎりで受かるとその後がなかなか伸びない、というのが長年の指導の実感です。今の力が知りたければ、学校で全員が受ける英検IBAという簡易型のテストがあります。ぱっと見ると、「3級合格レベル」などと書いてあり、総合判定は甘めです。でもよく見ると、リーディング部門とリスニング部門とに分かれた細かい評価があります。生徒には、この部分を見て次の受験級を判断するように伝えています。今、どの位置にいて、どの程度の努力（時間）が必要かを判断し、追い上げる。英語力をつけるには、それしかないはずです。この度、英検協会から東川中学校に、「令和6年度に英検に多数参加され英語教育に多大な成果をあげられました」という奨励賞をいただきました。確かに合格者の数は多い。町の補助も大きい。でも、私としては、合格者の数ではなく、いい合格をすること、を目指してほしいのです。おりしも、語学教育を世界展開する企業が「日本の英語力は123カ国中96位、過去最低を更新」と発表しました。雰囲気学習なんて、実を結ばない。なんちゃって英会話はいらない。